出会い　ふれあい　助け合い

# サロン・あべの

<サロン・あべの>NO．28　　昭和63年10月29日（土）発行

<サロン・あべの>九月の出会い

## 「私の歩いてきた道」

十二年ぶりの東西交流が実現し、一六〇の国と地域の参加で盛大に開会されたソウルオリンピック。この日、昭和六三年九月十七日（土）に<サロン・あべの>は、九月の出会いを育徳コミュニティーセンターで持った。

一年前の九月の例会でも聴言障害者の結婚について取り上げたが、今日は聴言障害者を夫に持つ肢体障害者の秋野富美子さんに「私の歩いて来た道」と題して話を聞いた。

（司会　石田　律氏）

秋野さんは、十人兄弟の九人目として誕生、元気に過していたが、五才の時先天性股間節脱臼と診断された。しかし、とりたてゝ不自由を感じなかったし、目立つ程でもないので治療をすることなくそのまま様子を見ながら成長した。

十五才の時、実兄の都合で五ヶ月の実兄の児を実家で面倒を見ることになった。その頃、母親は更年期に入って体調を崩しており、十分孫の世話が出来る状態でなかったので、いきおい少女の秋野さんにその役目がまわって来た。抱いたり、背負ったり児の重さと、自分の体重が相乗して股間節に負担がかかり悪化した。

十八才の時、股間節の手術をしたが、医療ミスで、ギブスに巻かれた足は、神経マヒを起した。日にちが薬だろうと言われ退院したが、治らなかった。当時老いた両親と兄夫婦と住んでおり、リハビリをしながら和裁を習い、それを仕事にしていった。

兄はじめ、まわりの人たちは、両親の元気な内に結婚をと勧め、自分もその気になり、大阪府と市の結婚相談所に申し込み、お見合いをくりかえした。そして、六回目のお見合いで主人と出会った。主人は、耳が聞えない。足の悪い者同士ならいざとい

う時、子供を抱いて逃げられないが、耳が聴こえなくても四肢健常な人なら、不自由がなく助けてもらえるだろう。たとえ、自身手に職を持っていても、いつまでも両親とは暮らしていけない。とも思い、またまわりの人たちが障害があっても、立派に結婚生活を送っているのにはげまされ、刺激されて、東京オリンピック開催の年昭和三九年に結婚。

主人は、生後一～二ヶ月頃の高熱が原因で聴こえなくなったが、母親が仕事多忙の為、聴言障害者としての教育を充分に受けられなかった。その為、言葉・単語の量が少なく、結婚してからも、言葉にまつわる笑えぬエピソードは、数えきれないほどある。

結婚当初「いきろ」と言いながら、冷蔵庫を捜すが見当らない。秋野さんは、何んのことか解らずじまいでそのときは終った。

後日市場へいっしょに行って、初めて「いきろ」とは「たくわん」だということが解った。たくわんの黄色を言っていたのが「きいろ」にならず、「いきろ」に発音されていた。又、あるとき秋野さんは「い（胃）が悪いので欠席する」と、ご主人に先方へ伝えてもらうよう頼んだところ「いじ（意地）が悪いので…」と伝わって大へんだった。

主人は、相手の口の動きで言葉を読むが結婚当初は赤ちゃん言葉で、「おなか　すいた」とか言っていた。茶碗やコップ・スプーン等使っている物の名前も知らなかった。タバコを吸っていたが灰皿という名詞も知らなかった。それからは丹念に、根気よく一言、一言　言葉や物の名称を殖していった。「たちつてと」は言いやすいが「さしすせそ」は難しく、発声の時、口に手を当てて練習したりもした。

結婚してすぐに妊娠し、身重になった為、体重がかかって足が前より悪くなった。手術が必要ということになり子供のおしめが取れるのを待って入院した。当時は買い物に不便な所に居たが、少しでも楽な方へとその後現在の王子神社近く（阿倍野区）へ引越して来た。

子供（男子）が小学六年生の時、悪い足をかばうため良い方の足迄痛みだし手術が必要になった。一年二ヶ月入院したが、その間息子と主人は苦労しながらもよくやってくれた。

当初、主人は紳士服の仕立をし、私はその手伝いをしていたが四級（主人）と五級（私）では年金が付かず生活は苦しいときもあった。いまは両松葉杖が必要な一級身障者となり、主人も補聴器が使用出来なくなっており、共に基礎障害年金をもらえるようになり生活は少し楽になった。

息子は、高校卒業後専門的勉強が必要と言うことで、現在はリハビリの学校へ行き夜はアルバイトをしている。

その息子が、障害者のことを学んで「耳が聴こえないということは、言葉を言えないことや。言えないことは、その脳が活躍しないということや。一見アホに見える時あるけれど、それも障害やと思ったり」と言ってくれるようになった。

「なんで自分の両親は、障害者や」と言われてもしかたがないのに、よう解ってくれる息子に成長してくれて嬉しい。

結婚して来年二月で銀婚式を迎える。ここまでこられたのは、周囲の人に恵まれたおかげだと思っている。特に三年前より主人と二人して文の里手話グループに入り、多くの仲間に出会えたことは幸せだと思う。

おだやかに今の幸せをかみしめながら話しを終えられた。

# 連続 入賞おめでとう 第一部

大阪府社協主催の第十六回福祉広報紙コンクールで、本紙「サロン・あべの」が優良賞に選ばれ、九月二一日、府立青少年会館文化ホールで開かれた「昭和六三年度大阪府社会福祉大会」で表彰を受けました。今回の優良賞の受賞は昨年につづいて二度目。

なお、同コンクールの「入賞紙誌集」に掲載された本紙に対する「入賞評」はつぎのとおり。

いつも一面の導入が魅力的なのが特色。NO. 21は「車イスが見た韓国　ハワイ」、NO. 22は「与謝野晶子　歌と書のハーモニー」。いずれもとても楽しく興味深い記事で、歯切れの良い見出しと、余白を生かしたレイアウトが記事をひき立てる。「自立」や「出会い」など読者参加記事もイラストとよくマッチして楽しい。

ページ止めの編集手法、四だん組みの検討などが課題ではないか。

このたびの本紙の優良賞受賞に対して、多くの方々より心あたたまるお言葉が寄せられました。ありがとうございました。

## 福祉広報紙コンクール「優良賞」受賞の報に接して

田中　美智子

おおさか・行動する障害者応援センターに、事務局のお手伝いに来られる石田さんが、月一度は、協会の事務局にもあの優しい笑顔を見せて下さる。サロン・あべの紙を届けて下さるのです。その日、私は待ち兼ねる様にして、昼食時に貸り読むことにしています。

二七号のトピックニュース！　福祉広報紙コンクール「優良賞」連続受賞、やりましたね冨田さん。おめでとうございます。当然、当然とひとり悦に入って陶然としています。

傍目ながら、サロン・あべのに関しては、誕生までの生みの苦しみの日から今日までの、冨田さん達の情熱と、弛まない努力に敬服し、大いに啓発を受けている者として、ついでに、ずうずうしくも、皆様方のお喜

びに便乗させていただいているのです。

都合で、サロン・あべのには発会式を含めて二度出席しただけの私ですが、当紙のおかげでひとかど、会の活動には精通しており、参加者の気分にさせてもらっております。

障害者の様々な自立の努力に、暮らしの工夫などに、感動したり、参考にしたり…。

旭さんの手話についての連載は、ボランティアの需給調整をしている私には、有難い情報源としての愛読欄です。岡さんのエッセイからは、筆者の優しさと温かさが伝わる思いで、すっかりファンとして毎号が楽しみです。

私の心を捉えて離さない、サロン・あべのに集る人々や、編集者の人間性と、気取りのない手づくりの味を届けて下さる石田さんの笑顔を、今月も待ちわびています。

## 評価された「サロン・あべの」紙

南光龍平

毎号毎号、身近な話題と生活にすぐ役立つ情報を提供してくれている「サロン・あべの」紙が、大阪府の福祉広報紙コンクールの優良賞に輝いた。それも、二年連続の受賞とうかがい、「おめでとう」の言葉を心からお贈りしたいと思います。

それと共に生活に密着したテーマをいろいろな角度から取り上げ地域の人々と一緒に考え、語り合える、肩のこらないサロンの雰囲気をそのまま伝える「サロン・あべの」紙の紙面づくりへの努力が評価されたことが大変大きなことだと思っています。

これからも「ホンネ」で語り合える「サロン・あべの」であり、ええカッコしないでみんなの気持を素直に伝えあうことのできる「サロン・あべの」紙であることを願ってやみません。

## レベルがちがう

中川雅子

新聞をいつも送ってくださって、ありがとう。楽しく読んでいます。学校の広報をしている方に先日見せました。大変勉強になったとお礼の言葉をいただきました。レベルが違うとびっくりされました。

ほんとうに、すばらしい新聞です。

## 紙面にやさしさ、思いやり、ユーモアが

田中好一

このたび、大阪府福祉広報コンクールに於いて、昨年に続き優良賞を獲得されたことを知り、関係者各位に深甚の敬意を表します。小生は〈サロン・あべの〉の編集に携わっている石田　律君とは中学校の同窓生で、進む道は違いながらも何となく連絡の途絶えることのなかった親友であります。

彼を親友と云える小生の口から石田君のことを語るのは、どういう訳かむつかしいのです。健常者の小生も昭和六一年十一月、急性心筋こうそくで倒れ医師や妻の機転、医学や薬学の進歩の御恵で三度の手術を乗り越えることが出来ました。今も小生の心臓は普通の人の六五％しか動いていません。いや、六五％も動いてくれているのです。だけど健常者と云えるのかどうか…。

そんな小生が、ある日石田君の持って来た〈サロン・あべの〉を見て一瞬不思議な気がしました。ズッーと以前に見たことがある様な、会ったことがある様な気がしてならなかったのです。三年振りの同窓会に

欠席せざるをえなくなった理由がバザーであり、仲間を語る代わりに＜サロン・あべの＞を持って来てくれたのだと理解した。

欠席することが悪いと、同窓会の幹事長をしていた小生に会いに会社まで訪ねて来た彼を嬉しく迎え、梅田まで車で送りました。彼が下車した席に＜サロン・あべの＞を置いてハッと気がつきました。見たことがあり、会ったことがあるのはあたりまえです。＜サロン・あべの＞そのものが石田律君であり、石田　律君が＜サロン・あべの＞であったのです。紙面にはやさしさが随所に出ていて、思いやりが感じられ、ユーモアーが含まれているのが明るくていゝ。これは石田君だよ全く。本当のところは、石田君とは呼ばない、五〇を越えてもやっぱり律ちゃんの方がいい。僕もロータリークラブでいま青少年奉仕委員長として頑張っている。連続受賞で弾みをつけて益々の御発展を祈念致して居ります。「出会い　ふれあい　助け合い」の＜サロン・あべの＞を通じて対話が出来るようになればいゝなあと思います。

とに角、関係者の皆様、読者のみなさん、北大阪の片隅から「おめでとうございます」「がんばってください」

祝！　二年連続　優良賞！

おおさか・行動する障害者応援センター

事務局長　大　友　章　三

機関紙＜サロン・あべの＞が二年連続して、「大阪府福祉広報コンクール」で優良賞を受賞されたことを聞き、心よりお祝いを申し上げます。

本当におめでとうございました。

私共も＜サロン・あべの＞と同じように障害者とVとで活動を盛り上げ会員間の連絡と交流を進める為、「すたこらさん」という機関誌を出しています。だから、月に一回、発行することの「よろこび」と「しんどさ」はよくわかるのです。

自分のことのようにうれしい気持でいっぱいです。これからもよりよいものをつくられることをお祈りすると共に楽しみにしております。そして、来年は「すたこらさん」が受賞できるよう、頑張りたいと思います。

# 恐いひとびと

今年の春、ヨーロッパを旅行することができたのだが、ベルギーのホテルで見たテレビ番組のことを思い出している。

ベルギーは西欧の中央に位置するためにいろいろな国のテレビ放送を見ることができる。その夜、ぼくは、ベルギー、オランダ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア等のテレビ番組が一度に見られるテレビを前にして、深夜まで飽きずにそれを見ていた。

ふと、ナチスの映像がよく出てくることに気がついた。イギリスでもフランスでもベルギーでも、そして本国ドイツでも、その夜は、ナチスの特集をやっていた。あとでベルギー人の友人に聞けば、その日は、ナチスがオーストリアを侵略しはじめた日だったそうだ。

第二次世界大戦が終わって、そろそろ半世紀がたつのだが、まだ徹底してこのような番組が続いていることに驚きを感じた。広島の原爆の日や終戦の日は別として、日本が中国と戦争をはじめた蘆溝橋事件の日や、あるいは韓半島（朝鮮半島）の支配がはじまった日に、日本でそれに関するテレビ番組が組まれたことはまずなかったのではないだろうか。被害者ではなく、加害者の立場から戦争をふりかえることを日本人は避けてきたのだろう。

そういえば、ぼくは西ドイツの政府が援助している半官半民の語学学校で、いまドイツ語を習っているのだが、その一番初歩の教科書に、ナチスの犯罪を扱った一章が設けてあるのである（もちろん執筆者はドイツ人である）。それを見たとき、ぼくはひどく感心してしまった。そこに西ドイツ人たちの『良心』を見たような気がした。

それに対して、外国人が使う日本語の教科書に、日本軍の残虐な行為が扱われることがあるのだろうか。おそらくないのではないか。日本の子供たちが使う教科書にさえ、日本軍の残虐な行為は隠されつつあるのだから。

こんなことを書くのは、この夏、韓国やオーストラリアを旅行したときにも、同じようなことを考えさせられたからだ。

シドニーで偶然知りあったシンガポール人の青年は『日本人を見ると、はじめは本当に恐かった』と言っていた。彼は親族や地元の人たちから、日本人がどれほどたくさんの人を殺し、拷問にかけたかを聞きながら育ったのである。

釜山で知りあった大学生は『「ハイッ」という日本人の声を聞くと恐ろしくなる』と言っていた。彼は、日本の憲兵が上官の命令に対して「ハイッ！」と緊張した声で答え、そして次々に韓国のひとたちを日本刀で切り、殺していく（ドキュメンタリー的な）映画を何度も見てきたのだった。

その恐怖はわかるような気がする。ぼく自身、西ドイツで列車を間違えたとき、駅員に大声で注意されたが、そのドイツ語の響きに、ヒットラーの演説を思いだしてしまった。そして、日記を書いたアンネが、どんなにか恐ろしい思いで、この言葉の響きを耳にしただろうと思い、背筋が寒く

なってしまったのである。

日本人が金に物を言わせて、外国の土地を買い占めたりして、外国人から嫌われているのは知っていた。しかし、アジアの人びとから恐がられているとは考えもしなかった。過去の行為の残虐さのために、日本人は恐怖の対象となっているのだろうか。ただ単に戦争の相手国だったというだけではなく、捕虜を虐待したということで、オーストラリアにさえ日本人を憎んでいる人が大勢いるのである。

ソウルのオリンピックで、日本の応援団のひとたちが陽気に大きな日の丸を振っていたが、あれはユダヤ人たちの前でハーケンクロイツ（ナチスの旗）を振るようなものだ。あの旗の前で、多くの韓国人たちが虐殺されたのだ。日の丸を振っている日本人には全く悪気はないのだろうが、その旗からアジアの人たちが連想するのは、血と暴力と虐殺だけかもしれない。

そして、その恐怖の中核にあった人が現在、重病であるという。その状況をめぐるテレビや新聞の報道ぶりを見ていると、日本には実は限られた範囲の報道の自由、言論の自由しかなかったのだということに気づかされ、ぼく自身もなんだか恐くなってしまった。

日本は恐い国だと言うアジアの人びとと出会うなかで、ぼく自身も、どうやら日本の人を恐いひとびとだと思うようになってしまったようなのである。（知）

## 第三回《わいわいふぇすてぃばる》に参加して…

上平幸雄

〝世界にうねれ　われら人権派〟と題された、第三回　わいわいふぇすてぃばるが、九月十五日（祝）　浪速区の大阪府同和地区総合福祉センターで、開催されました。たくさんの障害者やボランティアが、集った中で、今回の目玉は、ジュディ・ヒューマン氏（世界障害研究所　副所長）の記念講演「障害者の自立生活　アメリカと日本」でした。アメリカでの障害者の自立運動の歴史を中心に、ヒューマン氏自身の体験なども語られ、たいへんに興味深いお話を聞くことができました。

障害者の自立生活という点で、日本より一歩も二歩も進んでいるはずのアメリカでさえ、そこに到達するまでには、ものすごい闘争の歴史があったことを聞いて、日本の障害者運動も、もっとがんばらなければと思ってしまいました。ただ、通訳を介してのお話でしたので、学生の頃に英語をしっかり勉強していればアメリカの障害者運動の息吹をもっと感じられたのではないかと、残念でした。

また、この記念講演のあと引き続き、パネルディスカッション「日本の障害者の自立運動の課題」が、行われました。パネラーには、ジュディ・ヒューマン氏のほか障害者自立センター　えーぜっとの会会長で、入部香代子氏と、一年間アメリカでご研究の後、帰国されたばかりの、大阪府立大学社会福祉学部助教授　定藤丈弘氏の三人。それぞれに、障害者の自立運動への熱い思いを語りあっておられました。

## THE DEAF MUTE 18

旭　純子

### 手話通訳をめぐる問題点（四）

手話通訳者がろうあ者に対してどういう立場から接するか、そしてまた、通訳者や手話学習者の集団とろう団体との関係について考えてみたい。

「全日本聾唖連盟」は「手話通訳」について次のような方針を提起している。

一・手話通訳活動は聴覚障害者の願いに応えるものでなければならない。

二・手話通訳の制度化については専従手話通訳者の公的保障と手話奉仕員を以って充実させる。両者共に固有の意義があり、各々集団的、組織的な討議、研修が必要。

三・手話サークル活動については、ろう団体との協力関係が必要であること、また手話サークルは手話通訳がろうあ者のためのものである以上、ろう団体の意見を尊重し、その指導は正しく受け入れることが必要。

これらの方針は、ろうあ者の立場を代表的に述べているともとれるが、ろうあ運動の一部として自身の手話活動を位置づける健聴者がいる反面、単なる興味本位、趣味活動として考えて、ろうあ問題や運動に目を向けない手話学習者も増えており、そのことへの警鐘ともとれる。たとえば、最近、「手話コーラス」が話題を呼び、マスコミで報道されたことによって、まるで踊りを踊るような感覚で「手話コーラス」を覚える人々も増えた。それは手話の普及という面でろうあ者問題の啓発になるのかもしれないが、「ろうあ者問題」が根底にない手話の普及は、決して「ろうあ者への理解」につながるものではなく、単なる「手話のひとり歩き」にすぎないと思う。「手話のひとり歩き」現象は国際障害者年を契機とした「手話ブーム」の中で生まれた現象であるが、ろうあ者は、健聴者の中にそのような現象を発見して不安を感じたことであろう。これはまた、ろうあ者の健聴者に対する反発を招き、信頼関係にひびを入れる原因ともなりかねない。

手話通訳活動とろうあ運動との関係をどの様に考えるかは通訳者、手話学習者集団とろう団体との結びつきを考える上において重要な鍵となるであろう。

## おしらせ

■サロン・あべの十一月の出会い

日　時　昭和六三年十一月十二日（土）
午後一時三〇分～三時三〇分

場　所　阿倍野区役所二階区民ホール
（阿倍野区文の里一－一－四〇）

内　容　第三回阿倍野区ボランティア交流会　映画「たくさんの愛ありがとう」観賞後文科会で話会い。

会　費　なし。

申し込み　十一月二日迄。
TEL 06-691-1028. 冨田慶子へ。

■サロン・あべの十二月の出会い（予定）

日　時　昭和六三年十二月三日（土）
午後一時～四時

場　所　育徳コミュニティーセンター二階研修室（阿倍野区阪南町五－十五－二八、地下鉄西田辺駅北西五分）

内　容　クリスマスの集い

会　費　一〇〇〇円
プレゼント500.- 程度の品ご持参下さい。

申し込み　十一月二五日迄に冨田へ。
TEL 06-691-1028

親愛なる富田さんへ

お手紙とお写真をどうもありがとうございました。いまでは私は以前よりもいっそうあなたを想像することが出来ます。あなたは少女のようにみえますね、おおきなお嬢さんがいるようにはとても思えません。

ところで岡さんがドイツで写された写真の焼き増しは受け取られましたか？もしまだでしたら、私の写真を次の手紙にいれて送ります。わたしたちのグループの写真や紹介資料はないのです。どうしてなのかわからないけれど、たぶん活動がスポーツに集中しているからでしょう。わたしたちのグループの結束はあなたのグループほど強くはないのかもしれませんね、というのもこれまでメンバーがよく入れ変わりましたから。

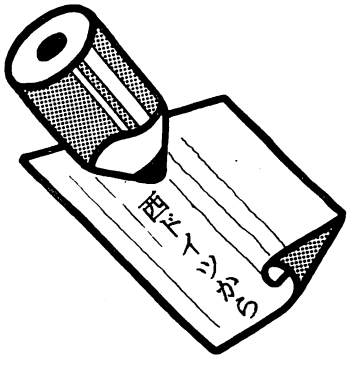
わたしたちが温泉を訪れたのは大成功でした。飲めない塩水ですが、とても楽に泳ぐことが出来ます。この水は普通の水より体を浮かせてくれますから。でもそれほど深くありません。私の体には支障はなかったのですが、みんな体にさわらないかとこわがって、水に入ったのはメンバーのごく一部でした。わたしたちは泳いだ後、ケーキを一緒にいただきました。とても素敵な一日でした。

わたしたちのミーティングは５月２４日で終わり、９月１１日までお休みです。このことはとても残念です。９月になればサファリパークへいく予定です。これは動物園の一種ですが、檻の中に動物は入れられていなくて自由に動くことができます。そしてわたしたちが公園内をバスに乗って移動するのです。

わたしもこの旅行に参加できればいいなあと思っていますが、６月２０日に病院へ行かなければなりません。病院には長くいたくはないですね。

では富田さんとグループの幸福を祈りつつ・・・

ブリジットより




Brigitte Ehrenberg
Duererstr. 1
4750 Unna
West-Germanie

Mrs. Keiko Tomita
3-26, Hannan-cho 6 chome
Abeno-ku, Osaka City
545 Japan

June 10th 1988

Dear Mrs. Tomita,

thank you very much for your letter and yuor photos. Now I can imagine your person much better than before. You are looking like a young girl; I don't think you could have a grown-up daughter.

You don't write whether Mr. Oka have given you copies of the photos he made in Germany. If not I will send you a photo of me in one of my next letters. Photos or information-material of our group-members don't exist. I don't know why this is so, but perhaps activities are concentrated too much on sports. Perhaps also the connection of our group isn't as great as in your group, because the members often changed in past.

Our visit to the hot fountain was a full success. The salt-water can't be drunken, but people can swim very easily, because this water carries the body better than normal water. Beside it isn't very deep. I have no problems with my health, but only a few members of our group went into the water, because they were afraid of falling down. After swimming we eat cake together. It was a nice day.

Our last meeting was in May 24th, now there are holidays til September 11th. I am very sorry about this fact. In September we will make another trip to a Safary-parc: this is a kind of zoo, but the animals are not in cages, they can move freely and we will drive with a bus through the parc.

I hope I can participate in this trip, because I must go to hospital in June 20th. I hope, I must not stay there for a long time.

With the best wishes for you and your group

Yours Brigitte

# なんとかしてェ〜な

斉藤孝文

## 自分自身に「なんとかしてェ〜な」

なぜ、こんな題を付けたかといえば、ご存じの人もおられるかと思うけれど、僕の親は、もう年老いていて、おやじの年齢はかぞえで七七才。おふくろは、六八才。

もうそんな年なのに、僕は、経済的自立はおろか、身辺自立も出来ないありさまです。それで、いつも親は、僕の世話で明け暮れるせいもあって、早く施設か自立して欲しいと言うのです。が、よく自立してる人の家に泊りに行きますが、その人の体力はものすごく、僕なんかに比べたら雲泥の差。とても体力的についていかれない感もあるのです。

これ一つとっても、自立は不可能に近いし、かと言って施設に入るのは、とても嫌だし、ジレンマから、自分自身に「なんとかしてェ〜な」という題を付けました。

## ワンタッチで閉じる傘ありますよ

前号の「窄める時もワンタッチ」を読んで小川氏から、この秋発売のワンタッチ傘を紹介した新聞の切り抜きを送っていただきました。その記事によりますと、

「閉じるときもワンタッチでサッとできる便利な傘がこの秋、登場。これはアイデアルが開発した『マイフレン』で、開くときと同じボタンをチョイ押せば、シャバッと閉じる。一〇年前にすでに開発していたが重くて実用的ではなかった。今回はぐ〜んと軽量化に成功。」

値段は無地が三八〇〇円、プリント物は四〇〇〇円。

## ボランティアのつどい

秋雨降りしきる九月二四日（土）午後、「ボランティアのつどい」が、阿倍野たんぽ作業所で開かれました。

社会福祉法人聖フランシスコ会理事長のライムンド・W・チネカ神父を講師に迎え、「地域社会における作業所の役割」についてお話を伺った。ドイツ出身のチネカ神父は、在日三一年。生野区に建設した教会を拠点にして、保育所、子供の家、生命の電話、作業所、紙すきの家、旅立ちの家等の設立活動や運営に関わってこられた方です。

今は、地域に根ざした障害者の職場と家作り・人間関係作りを目的に活動されていると温かい笑みで語られた。

その後、たんぽぽ作業所の仲間たちがしている「手作りクッキー」「組立作業」の仕事ぶりを見せていただいた。

最後に出していただいた、焼きたてのクッキーと熱いお茶のおいしかったこと。

ごちそうさまでした。サロン・あべのからは、六名が参加しました。

## 山本篤江　私の京都国体（4）

いよいよ近づいて来ました。毎日猛練習にはげんでいます。電動のことですから、正直いってスピードは練習量によって云々ということはありません。前回書きましたように、テクニック面ではずいぶんちがってくるでしょう。

それより気がかりなのはキンチョウです観衆を前にして、プレッシャーを感じてのキンチョウとCP特有のアテトーゼによるキンチョウが出る心配があるのです。このふたつのキンチョウが増幅することも、なきにしもあらずです。もちろん、あがりからくるキンチョウも、CPのキンチョウも、これが重なったキンチョウも出ないで、レースが出来れば最高です。一生懸命練習することで、キンチョウを消去しようとがんばっているのです。これだけ猛練習しているのだから負けない。キンチョウしない。キンチョウは出ない。一種の自己暗示をかけるために練習しているところもあるのです。大丈夫です、安心して実力を発揮して来ます。

（談）

## 『あっちゃん　ガンバレ』

旭　純子

「実は国体に出ることになったんヨ」

「エーッ、ホンマに？　おめでとう！」

思わず大声をあげた私に、「あんまり大きな声で云わんといて…。これからが大変やねんから」はにかむように答えた彼女。

それから、練習が忙しいようで、しばらくサロンでも顔を合わしてなかったけれど、九月の〃出会い〃の時に久しぶりに会ったら意外に元気そうで、いつもにも増してオシャレな雰囲気…。

髪ふり乱して、目つきまで変わってるのでは…との想像はみごとに外れてしまいました。

彼女とのお付き合いは、もう、かれこれ三年。サロンの運営委員会では、時のたつのも忘れて障害のこと、精神的な自立について…etc、色々なことを話し合い、そのたびに彼女の思慮深さに感心させられてきました。その思慮深さが、「これからが大変やねんから…」と云わしめたのでしょうが、反面、「雨が降ろうが、槍が降ろうが…」という無鉄砲とも思えるようなたくましさを秘めた彼女のこと、厳しい練習ものともせず、大会では、その実力を充分に発揮されることでしょう。

ソウル五輪の女性走者　ジョイナー選手ばりのオシャレでファッショナブルなレースを期待しています。

〃サロン・あべの　の星〃あっちゃん

ガンバレ　！

## ◉平和寮の「みんなあつまれ！」

第二回「みんなあつまれ！」のバザーが「盲児施設平和寮」の主催で十月一六日（日）日本ヘレンケラー財団平和寮で開かれた。このバザーは、同寮が地域に理解される施設をめざし、昨年から施設を開放して寮生との交流を目的として企画されたもので、あんま、マッサージ、昼店、さをり織り、バザー、陶芸、盲人機器展のほか、こどもたちの作った作品も展示されていた。（I）

日々のよろこび添えて
＜サロン・あべの＞に贈る〃灯〃
九月のカンパ合計　三〇〇〇円
ありがとうございました。

## 〃いわさき　ちひろ〃のカレンダー

文の里にあります、どろんこ共同保育所では、保育所の運営資金不足のため、バザー等の物品販売を行なってきておりますが、今回、〃いわさき　ちひろ〃のカレンダーを販売することになりました。

一部１２００円です。

お部屋のインテリアとしても、ぜひ、お買い求めください。くわしくは、ウエヒラ迄
☎０６－６２１－４３６５

＜サロン・あべの＞第２８号
発行日　昭和６３年１０月２９日（土）
発行・編集＜サロン・あべの＞運営委員会
［大阪市阿倍野区阪南町6-3-26
電話(06)691-1028冨田慶子］
印　刷　セルフ社　電話（06)652-0337
［阿倍野区阿倍野筋4-18-19 ］
定　価　￥６０．

## 編集後記

いつも本紙をお読みいただきありがとうございます。陰になり、日なたになって、お力添えくださるみなさま方のお陰で、昨年に続いて今年も優良賞をうけることが出来ました。

これを機に、なお一層紙面の充実をはかろうと、一同カブトの緒をしめています。そこで、本紙では「連続　入賞おめでとう」を今号と次号に掲載いたします。第一部――みなさまから寄せられたおことばを今号に特集。第二部――次号では本紙ならではの編集譚を予定しています。

この二号にわたる特集で、本紙へのご理解がより深まれば…と願っています。　（石）

九月のサロンへ小川氏、金子様よりお茶受けをいただきました。ありがとうございました。